

“第1回のかぜひろば”へのご参加ありがとうございました。

10 月は「のかぜひろば」への参加ありがとうございました。お天気にも恵まれ、そして皆さんの協力のもと第 1 回目の「のかぜひろば」を開催することが出来ました。皆さんの暖かいまなざしの中、子どもたちは安心してのびのびと普段の姿を出すことが出来たかと思います。たくさんの感想も含めありがとうございました。また、気づいたことなどありましたらお聞かせください。

**子ども時代に夢中になることを**

今年は吉野彰さんがノーベル化学賞を受賞しました。吉野さんは環境問題にも心を寄せ、「リチウムイオン電池で電気自動車の普及が進み、クリーンになるだけでなく、巨大な蓄電システムが出来ることになり、太陽電池や風力発電が普及しやすくなる」と説明し、環境問題への貢献も評価されています。

また、インタビューで、子どもたちや若者たちに、「子どものころに夢中になるものを、好奇心をどん欲に持ってもらいたい」という趣旨のメッセージを言っていました。氏は今でも好奇心旺盛だそうです。

これまでもノーベル物理学賞を受賞してきた、赤崎勇さんや中村修二さんたちは子どものころ、自然の中で遊び、夢中になったことが研究の土台になっていたというような内容のことを言っていたのを思い出しました。

赤崎さんは、少年時代手つかずの自然の中で、「毎日のように昆虫を追いかけた。互いに接近しあうトンボの習性を利用し、最初に捕まえた 1 匹を棒に結び付けたひもでくくり、別の個体を呼び寄せる工夫を凝らした。」ということが新聞記事にありました。すごいなあと感心して記事を読みましたが、日頃、子どもたちと接する中で、子どもたちは本当に科学の目を持っているなどその時々で感じることがあります。

子どもたちが夢中になれることを保障し、大切にしていきたいですね。

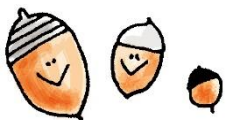
子育てを社会全体で支えることが出来る社会に

昨年豊田市で三つ子を育てる母親が我が子を死なせてしまう事

件が起き、先月名古屋地裁岡崎支部及び名古屋高裁で実刑判決が出されました。この事件の内容に関してはずっと心を痛めて来っていて、判決の内容もすっきりしないものがありました。決して許されるものはないが、三つ子にミルクを 1 日に 24 回与え、母親は 1 日の睡眠時間が 1 時間の時もあったと聞きます。授乳だけではなく、子どもたちの相手やおむつの交換、沐浴、ぐずりや鳴き声等で育児に追い詰められ、うつ状態だったと弁護側は話しています。母親は保健師に育児の不安を伝えると、一時的に子どもを預かる「ファミリーサポートセンター」を紹介し、登録はしたものの利用はしていない。3 人の子どもを抱えてアパートの階段を下り、事前の面談に行くことが出来なかった。母親が行政のサービスを利用できず、育児で孤立していたということが事件後明らかになりました。

週刊東洋経済・特集「子どもの命を守る」の中で、「岐阜県内で双子や三つ子をなど多胎家庭を支援する、NPO 法人ぎふ多胎ネットの糸魚川誠子代表は、『子育ては社会でするもの。すべてが自己責任でだと言われたら、誰も子どもを産みたいと思えなくなってしまう』と話す。」と書かれています。

「大変だね。」「ちょっと育児から離れてゆっくり休んで」という家族以外のサポートがあったらこんな悲しい出来事はなかったと思います。保育園はまさにその役割を担う場所でもあります。



のかぜ保育園は 10 月から子育て支援センターも開設しました。少しでもしんどい思いをしている家庭の支援の場になればと思っています。